

鶴見川流域歩行記

仲田五郎八企画調整局都市科学研究室

この流域歩行記は、鶴見川本流と支流の一つ鳥山川の昭和五十一年八月中旬の様子をまとめたものである。川を見るには、水量の少ない時期であったと思われる。見聞したことを欲ばって並べすぎた

かもしれないが、それなりに記録する意味もあると考え書きとめた。参考にした鶴見川関係の文献については、本号の読書案内「川をめぐる文献」(P七四)をご覧ください。

河口へ臨港鶴見川橋―八月十七日

国鉄鶴見駅前から大黒町岸壁行のバスに乗り、巨大なエントツ、パイプ、タンクのある工場街へ行く。鶴見川の河口へ行くのには、右岸にある東電横浜火力が左岸の東芝タービンの工場敷地からでなければ近寄れない。そのため少し遠まわりをして、大黒大橋をわたり、埋立工事中の大黒埠頭の岸壁から見ることにした。江戸時代末期までの河口は、生麦町、小野町あたりだったが、大正から戦前にかけて京浜工業地帯の中核として大黒

町、末広町が工場用地として埋め立てられ、大黒埠頭が埋立中である。大黒埠頭の位置は、鶴見川河口の先にある運河をへだてた正面にあり、河口が一望できる。

埠頭からは、海に一番近い鶴見大橋(橋長二五〇メートル)とはげしく自動車の行きかう高速横羽線の橋が、遠くに見える。昭和六十年代までという埠頭工事もお盆のためかブルトーザーやダンプの動きも少なく静かであった。埋立地入口には、「立入禁止―工事区域内なので魚釣りは特に厳禁する」という立札があったが、橋の下あたりで釣をしている人がいた。

鶴見大橋にむかって歩いてみると、電の通用門近くで、釣の帰りの母子が「あットンボ」といってムギワラトンボをつかまえた。鶴見の工場地帯でトンボをみつけることなんて多分めずらしいことなのであろう。河口付近を歩いていると、どうも川だか海だか、どんなところを歩いているのかわからなくなる。大黒町の食肉市場をすぎ鶴見大橋まできて、川岸

に近寄ることができたが、それでも工場のバラ線のすき間からでなければ、川を見るのは無理であった。橋の近くで作業中の五十代の男の人に川の様子を聞くと「このごろは、だいぶ川のゴミも汚れも少なくなった。朝などは、ハゼがずいぶいる」といっていた。

鶴見川を心から愛した故佐久間道夫さんは、『鶴見川誌』でつぎのように書いている。

「鶴見川は、悠々と流れている。その流域にあたる両岸の田圃が近代都市化と経済成長のかけに没し、昔日の面影なく消え去り見失われていこうとしている中に鶴見川の本流だけがわずかに残された古いものの姿のままに流れている。かつては、鯉の住みかとして有名だった清流も、いま澄んだ川面に月影をうつすような風情はなく、すっかり汚染されたものではあるが、昼となく夜となく流れつづけている。」

佐久間さんは、鶴見村(現在の鶴見町)の名主の子孫で、その晩年にあたり、鶴見川流域の村々が年々洪水で悩まされて

いた事実を伝えようと、名主文書を『鶴見川誌』として自費出版された。川誌はこの洪水の特徴について「平野をなされる勾配のすくない川である。したがってこの川は洪水となれば川上から川下まで一面の大満水となり、いく日も水は引かず川水が低い地によんで水腐になる。その水をはやく海に吐くためには川下の鶴見村などの堤防の高さをめぐってそれを低くしておきたい上流村々と鶴見村との出入がおきる」とある。ときには殺生

や入牢者問題を起し、治水問題で上流の村や対岸の村々がはげしくあらそった歴史を伝えている。このへんの事情は、『横浜市史』第一巻、「鶴見川治水・利水と農村」をあわせ読むと、はつきりする。概して、当時の横浜の水田は、生産力が低かったという事情のもとで、農民間の争いは深刻だったことがわかる。

明治以降、鶴見川は、大小三〇もの洪水があった。有名なのは、明治四十三年の大洪水、昭和十三年六月、同十六年七月、同三十三年九月で、一番新しいのは昭和四十一年六月のものなどがある。明

っていないが、不法占拠の家が並んでいたところである。

上流に向かって左岸堤防の上を歩く。

国道一号線にかかっている鶴見橋は、大正十四年一月のものであるが、現在、拡幅工事が行なわれている。『江戸名所図会』にある旧東海道に架っていた鶴見橋は、現在、鶴見川橋と呼びかえられている。

鶴見川橋をすぎると、河川敷に水草などがだいたい見える。おとなの背よりも高いガマが水際に生えていたが、アシの群落は、もっと上流でないと見られなかった。このあたりでは、何人かの子供のグループが捕虫網で糸トンボやバッタを捕まえていた。ある子供は、川岸のヘドロにつかり魚を網ですくっていたが、バケツの中には三センチメートルぐらいのクチボソやオタマジャクシ数匹が入っていただけで、魚がいるかどうか聞いてみてもあまりつかまらないという。森永橋に向って歩いていくと、森永橋の少し手前の中洲でカモメ七羽、新鶴見橋の下流でギンヤシマ、アカトンボを見かけた。昔ほどのあたりは、魚やトンボがいないのは、当然かもしれないが、数が非常に少ないように感じる。『市民グラフ』十号に掲載されていた、鶴見川橋のそばに住む川内辰二さんの話では、クチボソ、フナ、ナマズ、コイなどが捕れるということである。

両岸の堤防内には、中小の工場や住宅が建て混んでいるが、民家の屋根が堤防より低いのが印象的であった。

末吉橋く川向橋―八月二十日

末吉橋ぎわ上流左岸の川崎市幸区小倉に、鶴見川を管理している建設省関東地方建設局京浜工事事務所がある。ここから矢上川の合流点の手前に鷹野大橋があるが、左岸は川崎市との市境になっている。事務所に近いせいでもないだろうが、河川敷は芝生が植えられたり、萱も刈り取られよく整備されている。鷹野歩道橋から上流谷本川の常盤橋までは、左岸の連続堤防二〇キロメートルを神奈川県で簡易舗装して、青少年サイクリングコースを設け、自転車も無料で貸し出していた。

鷹野大橋右岸の堤防外の畑で腰にラジオをぶらさげてロックを聞きながらキャベツに農薬をまいていた四十代の男の話では「昔の河幅は今の半分以下だった。建設省が河川敷を広げるさい、一段下った河道寄りの部分を売った。堤外にあるこの畑までは水につかることはない」といっていた。昔の洪水の記憶については、昭和十六年のものだと思われる堤防破壊について話してくれ、駒岡一帯が流されたともいっていた。鶴見川は、

この十年ほど大きな洪水はないが、新羽で会った六十代の農家の人も昭和十三年六月の洪水のとき、弟が会社の勤めの帰りに、夜なので道と川との区別がつかず、川にはまって亡くなられたということであった。また、最近の川の様子は「水かさはずぐ増すがすぐひく」ということである。

上流の東急の開発や早淵川の流れる港北ニュータウン計画など流量がふえる要因をかかえているので、洪水の心配はまっているように思われる。

建設省の鶴見川水防設計画委員会現地視察資料にある、昭和四十一年六月の洪水の航空写真を見ると、当時の洪水・滞水の状況がよくわかる。矢上川、早淵川などの鶴見川支川を含む、流域の新羽、小机、川向など一面が湖と化している。

『横浜市史』一巻の付図「古代集落と墓域の分布」と重さねあわせて見れば、古代人が住んだ遺跡が発見できるのは鶴見川流域の低湿地である沖積地帯より一段高い山裾で洪水の危険を避けて住んでいたことが良くわかる。私たちの先人が、この利用しにくい氾濫原を、稲作のために水田に変えていったのであるが、現代人は、この堤防に隣あわせて、工場や家を建てて住もうとしている。氾濫原には、水が出るのはあたりまえという古代人の認識にさからうように都市化が進んでい

くのである。

話はかわるが、鶴見川中流の大豆戸町小机町のあたりを歩くと、私は、二十数年前、子供のころ港北区の篠原町で暮らしていたことを思いだす。夏になると一面、青田の大豆戸を歩いて、鳥山川へクチボソやタナゴを網でよく取りにいったし、鶴見川で泳いだ。その頃は、横浜線も単線で、貨物を運ぶ蒸気機関車が走っていた農村地帯であった。しかし、昭和三十九年秋、東京オリンピックの年に新幹線の新横浜駅ができ、駅前北部の区画整理が行なわれ、水田は埋めたてられまるっきり変わってしまった――

新羽橋のすこし手前の左岸の水門で三人の少年が釣をしていた。水が流れていない水門であったが、オタマジャクシ、クチボソ、メダカがバケツの中に入っていた。少年たちの釣っていた先隣の水門は、だれも釣糸をたらしいていなかったが新羽方面の工場の排水が混入して流れるらしく、魚が寄りつかないのだろう。

亀の子橋へ向かって歩く途中、新羽橋の上流の川岸でユサギ一羽、ギンヤシマ一匹が飛んでいるのを見かけた。対岸の鳥山川上流にかけて水田がある。亀の子橋は、河口から一五・八キロメートルの地点にあり昭和三十年に架え換えられた。この橋を境にして上流は神奈川県治水事務所の管理である。亀の子橋わき

のバス停のそばに、現在の橋ができた直後の昭和三十一年一月に建てた記念碑がある。碑には「大正八年当時マデノ新羽部落ハ作橋太尾橋ニ依ツテ大豆戸ヲ經由シテ横浜ニ通ズル道路ト鶴見川ヲ渡シ舟に依ツテ小机駅ニ至ル歩道トヲ持ニ過キナカツタ、ココニ於テ小机駅及ビ横浜方面ヘノ新道路開發ヲ決議シ自力ニ依ツテ用地ヲ買収シ部落民一丸トナツテ之ガ建設ニ邁進シ、結果新羽新道亀甲橋ト称スル街道ヲ持ツニ至ッタ……」と彫つてあった。

川向橋へ行く途中、大熊川の合流点付近は、アシの群落が見え、川向町には、水田、畑、ビニールハウスが見られる。第三京浜道路の鉄橋の手前に、小机の堰がある。堰から落ちる水は、中性洗剤のあぶくが一面にたっている。鶴見川の、このあぶくのすごさは、別の日、川向の堰で見たが、あぶくのしぶきが風に飛ばされ、近づくると体につくくらいであった。小机の堰で、たまたま投網をしている中年の二人の男の人をみかけた。川岸から声をかけると、大きいのはとれないといっていたが、しばらく見ていると片方の人が四〇センチメートルぐらいのサイズの大物を捕えた。川岸は、護岸がしてあったが、水藻がかなり見えていた。

川向橋～水車橋——八月二十三日

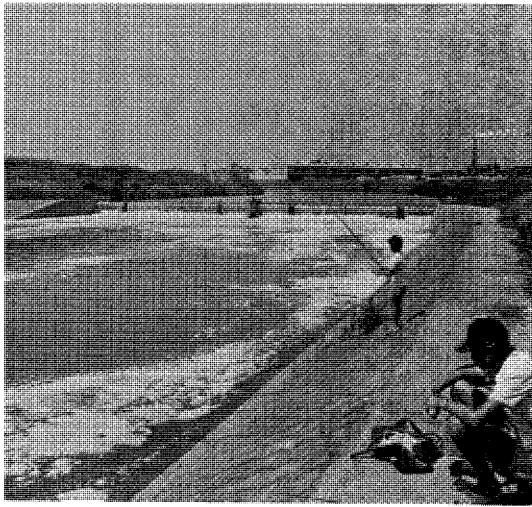
川向橋より落合橋方面に向って歩く。鶴見川は、この部分の右岸が国鉄横浜線にもっとも近いところを流れている。堤防から時々、緑と空色の混合編成の横浜線が走っていくのが見える。目の前をメスのギンヤンマが飛んでいる。またしばらくいくと、五羽の親子のカルガモが、流れに沿って泳いでいた。流域の左岸、佐江戸町、池辺町と落合橋の上流青砥町は、用途地域で工業地域に指定されているが、昭和三十年代から四十年代にかけて、内陸の工場地帯として開発された地域である。横浜線の鴨居駅の裏は、昔は橋がなく左岸の工場へ通勤する人は不便だったらしいが、M通信やN電機のほか大小の会社が出てきて、今では、人が通れるだけの橋が架けられている。そういえば、中消防署から港北消防署へ移ったMさんは、港北区が、各地で水が出るのと、橋が少なく交通が分断されているのに驚いていた。

勢も早くなる。護岸は、兩岸ともできていて、川もV字型になり川幅もずっと狭まくなる。堤防は、ほとんどないくらいに低くなり、ある所からは、水田が盛土されて、むしろ畑の方が堤より高くなっている。ところどころに栗や梨などの樹園地が見える。

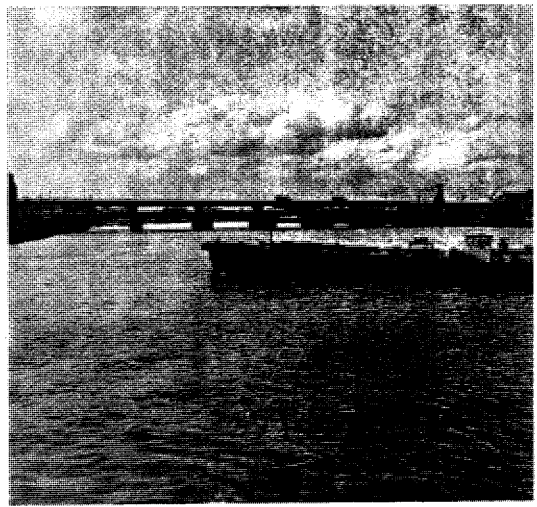
谷本川沿岸土地改良区の営農実態調査書(昭和四十九年三月)には「改良区の水田、畑、樹園地の割合は三六%、五八%、六%」で、野菜、穀類の複合経営が、標準農家で、大部分の農家が水稲作を行なっている。野菜の作付は、古くから路地、いちごや芋類が多く「栗などの果樹類が他の地域より比較的多いことは、改良区域内を荒しておけず、労働力不足対策として生まれたものであろう。」と報告されている。

市ケ尾町と下谷本町を結ぶ学校橋の上流には、東名高速道路と昭和四十一年四月に開通した東急田園都市線の鉄橋がある。鉄橋の先のサツマイモ畑で夏草取りをしていた市ケ尾に住む四十代ぐらいの男の人に話しかけると、炎天下に草とりをして忙しいのもわからないのかといった風であったが「昔はまがりくねった細い川岸にマダケがいっぱいあり、正月のしめ飾り用に売れたものだ。河川改修で川もまっすぐになり川幅も三倍ぐらいに広がり、最近では水が出ないが、昔はひどかった」という。またすこし先で、トウモロコシをいれていた五十代ぐらいの男の人は「このあたりは山が近いので『一雨一風勝負』といわれるくらい水が出やすかった。川の勾配も急なので田畑がすぐ流され、年貢も安かった」ともいっていた。二人ともそろって、東急など山の開発がひどいので、洪水がないなどと決して楽観してはいない口ぶりであった。

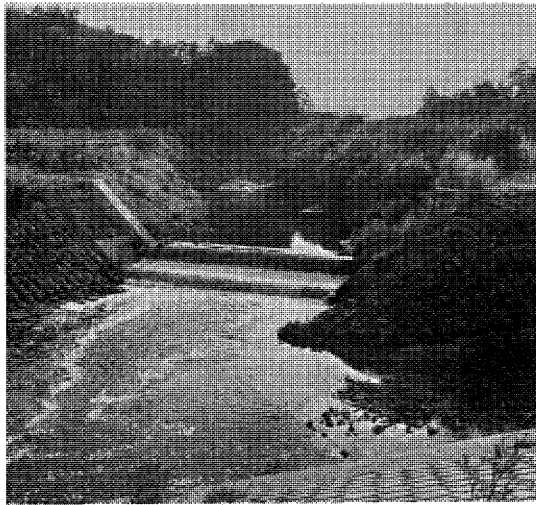
川間橋をすぎたところの左岸に鉄筋コンクリート建の新設の県立市ケ尾高校がある。建設のために、かなりの田畑がつぶされたのであろう。また、上流の鴨志田方面には、山が切りくずされ赤茶けた宅造中の地はだが見えた。まさに、緑の山がけずられ、谷や田を埋め込んでいるといった感じの光景である。山地の開発と水田の埋立ては、鶴見川の防災面での安全性を低めているという。事実、建設省は、ことしの六月に「鶴見川流域水防災計画委員会」を、学識経験者と自治体をメンバーに発足させている。設立の主旨は、流域開発が著しく将来八〇%の市街化が予想されるが、対応する基本高水流量(毎秒二、三〇〇トン)を都市化によって用地問題などおいてそれとはいかない。鳥山川合流点での放水路構想もあるようであるが、実現性について悲観的であるという。鶴見川で洪水が出れば、港北、鶴見区の人口密集地帯がもろにや



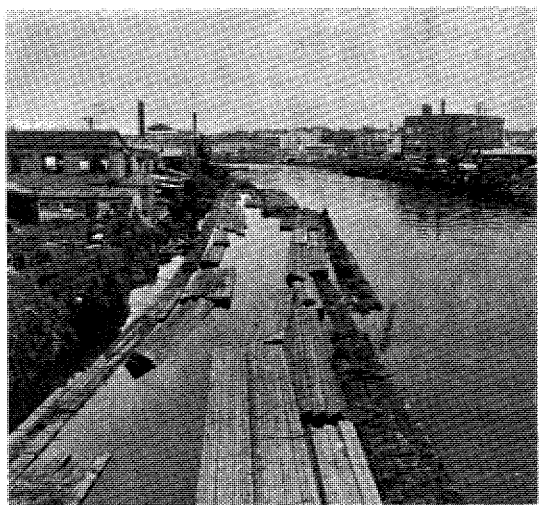
川向の堰の洗剤の泡、遠くに工場のエントツが見える。



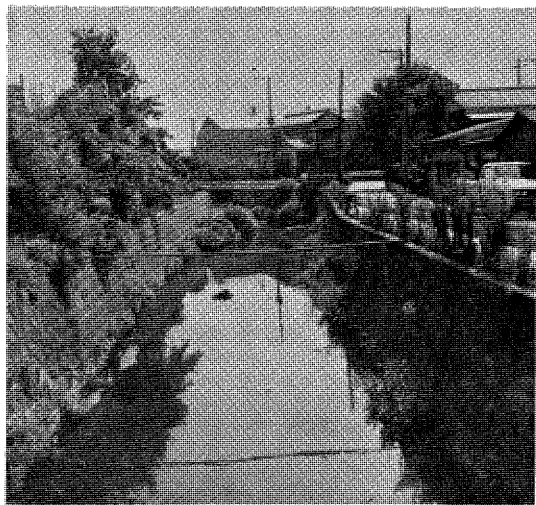
大黒町食肉市場裏付近、手前の橋は鶴見大橋。



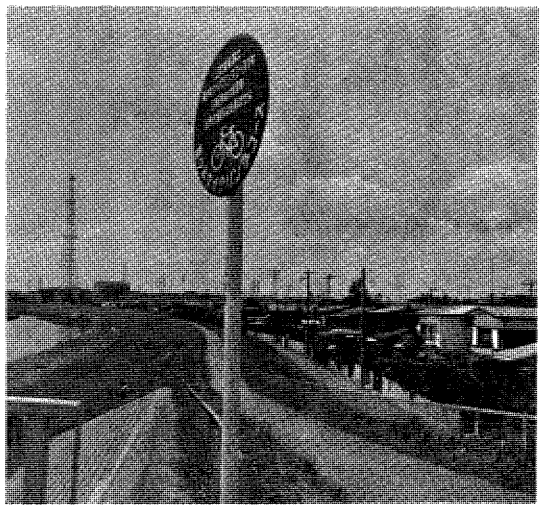
横浜の市境にある水車橋より上流のながめ。



潮鶴橋付近の無堤地帯、製材工場がある。



鶴見川支流鳥山川、この部分は讓岸がある。



鷹野歩道橋とサイクリングコース、右手、堤防沿に民家。

れるということなのだ。昭和四十二年度に、従来、神奈川県管理の二級河川であったものが、重要河川として国管理の一級河川に変更したのも、急激な開発と人口、工場など資産の増大した都市化現象に対応せざるをえなくなったためだ。しかし、流域の急速な開発を考えると、その割には安全性が向上しているという話は、どこにいても聞けない。

谷本川の主流、鉄、寺家町あたりは、佐藤春夫の『田園の憂鬱』の背景になっていたところである。今でも赤トンボの飛んでいるこのあたりを歩いていると、片田舎の名ごりがわずかに感じられる。横浜の辺境、水車橋まで川は、まっすぐに護岸がされている。水車橋へ着くころは、もう夏の日も傾むいてヒグラシの鳴き声が聞える。橋のたもとで、犬を散歩させていた人の話では、昔は水車小屋があったという。橋の上手は町田市であるが、そこから川は護岸がなく草や篠竹におおわれ蛇行しながら山すそを流れている。

鳥山川・砂田川―八月二十四日

鶴見川の市内七つの支川のうち、最後に鳥山川を見ようと、港北区役所区民相談室で、水害の陳情などについて聞く。その足で、横浜線新横浜駅から、鳥山川の鶴見川合流点まで、区画整理のさい川

ぞいにできた新横浜駅前公園という長い公園にそって右岸堤防を歩く。川の管理区分は、鳥山川までの一・九キロメートルが国で、上流は準用河川となり、横浜市があたっている鳥山川二・三キロメートルと左支川の砂田川一・四七キロとその末端に水路がつかっている。

鳥山川の主流の太尾町方面の大曾根堀部分は、下水道になっていて川はなくなっている。昔、鳥山の堰まで兩岸にあった桜の並木は、護岸工事のさいじやまであったのか全部伐採されて今はない。左岸の小机駅の北にあたる部分は、水田地帯であったが、合流点部分は、土盛がはじまり水田がつぶされかかっていた。速くに新幹線の往来をながめながら、この夏最高の残暑の中を鳥山町方面へ向って歩く。又口橋の少し手前の左岸堤防の下に乞食松地蔵があったが、川の改修以前は堤防の松の木の下にあったものが、ここへ移されたようだ。地蔵さんのそばに一人の老婆が地面にべたりと座りこんでいた。土地の人ですかと聞くと、ちょっとうなずいたきりまた遠くを見つめたままであった。私の子供だった頃は、このお地蔵さんは歯痛によいと聞かされていた。砂田川は、護岸もなく、応急のところどころ鋼矢板で護岸がしてある。昔は、水も澄んでいて魚もいたのであるが、今は、家庭排水が流れこみドブ川と化し

ている。

古くからの農家の家は、左岸の山すその一段高いところに家を建てている。右岸の道路ぞいは、田が埋められて畑になっているが、住宅もかなり建ちはじめていた。下村橋の川に接したところに家を建てた人々から水害の陳情が出されている。そのうちの一人、農業（この人の家は、川よりずっと高い所にある）Yさんの奥さんの話によると上流の菅田方面が開発されて、大雨が降るとしばしば、道路や畑、家に水が出る。応急の鋼矢板の護岸をしたので、このごろはだいぶよくなったというが上流の開発には心配そうであった。また川岸に住宅を建てたある家では、床上浸水を出している最中に、おばあさんが老衰で亡くなられたともいっていた。

砂田川の出水は、『調査季報』三六号で神奈川県区の「足洗川沿岸の住民」という個別調査で報告されているケース、田畑や山がつぶされ川沿いに家が建ちならび都市化の進む過程で水害が発生しているのと同様している。足洗川の場合は、昭和三十年代からであるが、港北区の砂田川では最近始まりましたということである。似たような事例は、横浜市内にまだまだ無数にあると思われる。鶴見川や鳥山川を歩いていて気づいたことであるが、川沿の低湿地に建つ家々が、広くない敷

地いっばいに二階家を建てている例が多いことである。本来ならば、排水施設が不十分だったり浸水のおそれが多いところは住宅化が遅れそうであるが、逆に地価もやや安いめか、むしろ宅地化は進む。水田を埋立てた低湿地に市民が住んで水が出て役所とのかけあいになるというところについては、『調査季報』四九号の「住民の要求と行放の対応」として緑区の青砥町の例を報告してある。

最後に、短期日であるが鶴見川を歩いて心に残ったことは、鶴見川が安全かというところであった。川向で農業をしている五〇代の男人は、家にせまる高い堤防が、過去二回の洪水のたびに広げられたものだと話してくれた。都市化のテンポは、早まっている。十年、五十年に一回の川の洪水対策と毎日の問題である下水道整備をどう調和させていくのだろうか。市内には、帷子、大岡など大小たくさんある川がある、さいわい鶴見川は、この十年、直撃する台風、集中豪雨がないので洪水が出ていないだけだということ。都市の川は、開発でしわ寄せを受けているが、また、私たちの意識の上でも、遠ざける風土なのである。【追記】 九月九日、台風一七号の集中豪雨は、鶴見川の上、中流域に洪水が襲った。破堤は、まぬがれたが、死者を含む大きな被害をもたらした。